

Title	咬二吧 (ジャガタラ) 總論
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro) 尚, 徳者
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.22, No.1 (1943. 9) ,p.71- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東亞資料欄
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430900-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東亞資料欄

序

故田中萃一郎教授は、明治三十八年慶應義塾留學生として渡歐せられるや、ロンドンに於ては大英博物館、印度省、パリーに於ては國民圖書館等に於て銳意大東亞史資料にして海外に保存せられる文書類を謄寫採集せられ、我國學界を裨益せしめんと努力せられる所があつた。其中殊にロンドンに於て採訪せられた太平天國文書の如きは貴重な資料として學界注目の標的である。此處に毎號我「史學」の餘白を借りて發表せんとする「咬嚼吧總論」も今より百年以前のジャワのことを記したる漢籍とし從來未發表のものであり、恐らく大英博物館に於て博士が発見謄寫せられたものと推定せられる。今日日章旗南海に輝く聖代に當つて此貴重なる資料を印刷に附せんとし、今より四十數年前「東邦近世史」の編述者たりし先覺故田中萃一郎博士を追憶する情今更切なるものがある。本篇を發表するに當り謄寫の勞をとられ、之に一々註釋せられたのは本塾語學研究所研究員陳荊和氏である。記してその好意に感謝する。

昭和十七年十一月卅日

史
學

第二十二卷

第一號

(三)

七二

松
本
信
廣

咬啣吧總論

尙德者纂

(卷頭咬啣吧地圖並に中國往吧地總圖を收む、今略す)

咬啣吧總論第一回

或照正音曰加拉巴

現今世界之人、或是住本鄉、或是往外國去者、都歡喜聽各樣新聞、而都要知道各處之人物風俗等、所以有人做地理之書、及曾往遊學之人至回家時、亦有記其所聞所見之事、致人人可知外國番邦之好歹而在其中可取益也。

呼名 夫在中國之西南邊、過大海約有四千餘里、或二百六十個經船^三、有一海嶼、名曰咬啣吧。在唐山各處人常呼其地曰咬啣吧、或曰吧地、或曰吧城、惟其本地人名之曰叭啞^五、此名爲全嶼之總名。因昔時其地先出一樣黍、番人所叫叭啞嚙、所以其全嶼名曰叭啞地。但不知因何唐人呼其名曰咬啣吧、或是因其地多出椰子、番人所叫做咬啣吧^六、或是因爲荷蘭人名其京都曰巴道以啞(Batavia)、或曰日荳余(Batavia)。

所以唐人聽錯、而亂呼吧城、未知孰是也。

方向 且中國人要開船到吧地、必在年終或正月起身、不然則恐怕風逆浪大而船隻難保。蓋吧地爲遠甚、而船往彼處、有時過大洋不見山頂、有時通窄海沙淺石尖多、及海賊常欲劫船、所以要擇其順風時纔可以無事也。又中國船離本地、或有直往南邊去、近小呂宋及笨天兩地方、以至三抹、及通土地公嶼窄海、然後行不到幾日、向西南去、則可以見吧地。且或有船離廈門或離廣東時、往向西南循海邊行至見海南、又自海南直往到安南山、而離彼總無見山至來近新埠頭或曰息力、又從息力行通料哩窄海、過萬甲山(Bangka)及巨港、一直到吧城。且吧地爲一大海嶼、長約有二千四百餘里、而濶約有四百里、而周圍約有六千餘里遠也。在吧地北邊有叭啞海、在其南邊有大南海(印度洋)、在東邊有囉哩窄海(Bali 海峽)、又過其小窄海、則到囉哩地(Bali 島)、惟只有番人往彼處也。在其西邊有孫大窄海(Sunda 海峽)、若過此小窄海、則到一大海嶼名曰蘇門得拉地(Sumatra)。其地甚闊、又內面有許多埠頭、似磅古倫、或曰望久汝、吧咯、亞齊、巨港等、有的屬荷蘭人管、有的屬暎咭喇人管、又有的還在囉咪咄人(Malay [Malay-ye]) 手下者也。

大小分 其叭啞地大概分爲兩分、東一分名曰叭啞地、而西一分名曰孫大地。其兩分都有各樣的人民風俗等及講話不同、蓋在東邊人皆講叭啞話、而在西邊人皆講孫大話。惟在咄啞咄(Batavia)及吧吧壠及囉哩囉啞(Surabaya)三個大埠頭人多講囉咪咄話。因在彼三處、更有生理、而多有商船往來也。且除其

兩大分外、其地分爲各州府、像在極西邊有噶明州 (Bantam)、在萬明東界有吧啞咄州 (Batavia)、此州中有吧城、爲荷蘭人之京都、亦爲咬啣吧總督所住之城也。離吧城一百餘里正南邊有嘑嘑山、在其山脚亦有總督之王府、廣大而雅美也。且過嘑嘑山有一條大路直引到井里汶州、又過井里汶還有幾個州。在東邊惟有兩個州府更大、名曰三吧壠 (Semarang) 及四里貓亞 (Surabaya)。此各州府皆在咬啣吧之北邊、近海、方便做生理、又皆屬荷蘭人管。惟在咬啣吧之南邊、有幾個州府、屬爪哇番人管、所以叫做爪哇地、其兩京都名曰梭羅 (Soerakarta) 及入爪 (Jogjakarta)。在彼有番王住、惟其番王亦同荷蘭人結盟、每年進貢、又給荷蘭兵同他守吧城池、以致惡徒不能反亂也。

火山 夫咬啣吧地方在海墘、周圍爲低、惟在中地有高山大嶽一千餘丈高、又有三十八個火山、有時發火參硫磺、又有時練石似大河紅熱自山頂上流下來、徧滿平地而燒滅凡所遇之物、惟致久堅凍而再成石也。在吧城之南邊有一個火山、名曰務物、或曰兀地山。吧城之人有時可見其火烟尙烙上去。且在別個火山、頂上常有大孔、圓似碗、周圍三四里遠而幾十丈深、爲火所出之所、在底下有熱水常滾上滾落、白如牛乳、而臭如硫磺。山頂上亦有幾個小孔、常有白烟以大聲噴出、其臭甚惡、以致人不可近之也。且在吧城之東南邊、離吧城三百餘里遠、有一火山、名曰把辨大羊山。前五十餘年被吞下地去、蓋或一日半夜時、近住之人看見一大白雲覆在其山上、致全山被蓋甚密也。卽時所見之人驚惶、而起身欲走、惟未能盡走脫之先、其山始落、而大半沈沒在地中也。當時地下大發高聲、如萬炮齊響、而煉石火炭齊飛出去、散在地面、周

圍幾多里也。此山沈落之後、留空一個地方、長約五十里、而闊約二十里、且四十個鄉被、而三千人民被死也。^{二六}看官請你想想、此事何樣險危而使人恐懼乎。且若一山被沈落、其形狀如此險危、何況在末世、其天地萬物被燒盡、衆人豈不更恐懼哉。又豈不該先悔罪信耶蘇歸善以致能預備其危時而避其後禍乎。且在三巴哇海嶼(Sumbawa)、離咬啣吧千餘里、有一火山名曰擔摩羅山、^{二七}前八年、^{二八}即嘉慶二十二年(A. D. 一八一七年)三月、此山發火、當時近晚忽然山上烈火並起、火燄冲天、而即時狂風趨作、走石飛出、大聲齊響、而煉石流下來、山脚房屋俱倒、五穀盡壞、及萬餘人民死在飛石流灰之中也。且其近勢爲如此險危、其遠形亦爲可怕、蓋在吧城、白晝時天色變暗、火灰似雨降落、盡蓋其屋頂、街路及田野幾寸深、而遠聽得大聲如銃炮齊鳴、致多人想必有海賊近港口劫船、又有人想或者是叭啞地之火山新發、而總不料其實爲千里遠矣。

川水 夫在熱地最要緊的就是川河、一則以灌其旱田、一則以爲人物便用、所以國內之溪河常謂之水利也。今吧地雖無甚大河江像中國之黃河、洋子江等、惟其還有五十條可通行小船之河、而山溪不可勝數也。且吧地最大之河爲梭羅港(Saerakarta)在東邊起源、流過梭羅洲府、而終在革利色(Grise)港口入海。此港爲闊且深、又長一千餘里、而可容大船載米二千餘擔、從梭羅下流通出海去也。

第一回註

一、要知道——知りたい。

二、好夕—好惡。

三、經船—海國聞見錄、南洋記では、就中國往噶喇吧而言、必從崑崙茶盤純用未針西循萬古屢山而至噶喇吧、廈門計水程二百八十更とある、斯くみると經船の「經」は更の音便であり經船とは更と同じことである（ジャイルスによれば更は夜間の時刻の變り目を指す場合チンと發音する。「經」と同音である。）

四、唐山—支那本土

五、爪哇—Java であるが支那の文獻では古來種々の字が當てられてゐる。閩婆、社婆、瓜（瓜）哇等が之に相當する、近世の文獻では清、謝清高の海録で耀亞、陳倫炯の海國聞見録で繞阿となしてゐる。

六、咬嚼吧—明史和蘭傳では之と同文字を使用してゐるが、明、張燮の東西洋考では下港の條に加留吧と註し、海録では、噶喇吧となしてゐる。ココ椰子 (Coco-palm) のことをマライ語では *kor* ジャワ語では *Kalapa* と稱してゐる。咬嚼吧は勿論後者に由來するものであらうが、もつと直接的な由來は *Batavia* が蘭人の渡來前 *Sunda Kalapa* と呼ばれてゐたことである。

七、小呂宋—海録、卷中、小呂宋の條初頭に、

小呂宋本名蠻哩喇、在蘇祿尖筆蘭之北、亦海中大島也、周圍數千里、爲呂宋所轄、故名小呂宋と見えてゐる。呂宋が *Luzon* 蠻哩喇が *Manila* の對音たることは明瞭であるが、明史呂宋傳等で、西班牙を指すのに呂宋なる名稱を用ひたので、従つて上引の記事が示すやうに、呂宋島そのものは小呂宋と呼ぶに至つたのである。

八、笨天—淳泥島 (Borneo) 東北のブルネイ (Brunei) を指すのであらう、ブルネイのことを明史では文萊となし、海録でも文萊となつてゐるが、笨天 (福建音 *Pia Thi*) は文萊よりもブルネイに近いと見るべきであらう。

九、三抹—海録卷中、咕哇國の條に見える三劃がこれに相當する、即ちボルネオ西岸のサンバス (Sambas) を指すものであらう、この地は同書の記事に依れば、

又名打喇鹿其山多金、内山有名喇喇者、有名息邦者皆產金、而息邦金爲佳……

と云つてゐるので、支那人も随分出掛けてゐたと思はれる。

一〇、土地公嶼窄海—前後からみて今の Biliton 島附近であると思はれる、この附近の島名で「土地公」の音に相當するのはない、土地公は南支に於ける代表的な民間信仰の對象であつて、農業の神たるのみならず、人に福德を興ふる財神として商家漁民に尊崇された。これが華僑とともに南洋各地に進出したのは云ふまでもない。

一一、新埠頭或曰息力—海録卷上舊柔佛の條で、番人稱其地(舊柔佛)爲息辣閩粵人謂之新州府……とあり、瀛環志略、南洋各島の項にてはこの地を指すに息力、實力の名稱をも擧げてゐる、舊柔佛が今日の昭南島を指すものである以上、息力も昭南島を意味することは云ふまでもない。而して、この息辣、又は息力の語源はジョホール海峽の馬來名 Selat Tebrau に由來するものであらう。

一二、料哩窄海—料哩とは海録に見える雷哩であらう、雷哩は現今のリオ(Riau)群島を指すものと思はれるから、料哩窄海とはこの附近の海峽を去ふのであらう。Journal Asiatique, 4^e serie, t. VII, 1846, p. 544 参照。

一三、濶—幅、又は廣いの意。

一四、巨港—舊港に普通である、舊港とは Srijaya 國の故地であり、唐では室利佛逝、宋では三佛齊となつてゐたが Srijaya の衰亡後は巴林馮(諸番志)、淳淋邦(瀛涯勝覽)となり、島夷志略になつて初めて舊港の名稱で呼ばれるやうになつた。即ち現今の Palembang である。

一五、榜古倫、或曰望久汝—海國聞見録では萬古屢、海録では茫咕嚕となつてゐる、馬來語では Benkulen 即ち現今の Benkulen (Bengoolen) である。

一六、吧略—把東とも云ふ、現今のスマトラ西岸 Padang である。

一七、亞齊—Atchin、即ち今の Kaetarodja 一帯を占めてゐた亞齊國を謂ふ、亞齊なる名稱の起りはその國王が Aceh Sumatra 國王と稱したのに由來するといふ。Journal of Straits branch of the Royal Asiatic Society, no. 31, pp. 123—130 參

照。

- 一八、講話—言語、福建語で「話をする」は「說話」とは云はず、「講話」と云ふを常とする。
- 一九、吧壠—海録では三巴郎、現今の支那製海圖では三寶壠、又は略して壠川と記してゐる、現在の Semarang のことである。
- 二〇、生理—商業、商賣を廣く指す、「做生理」とは商賣をするの意。
- 二一、井里汶—海録では蔣哩悶、今の Cheribon である。
- 二二、方便做生理—商賣をするのが便利である、都合がよい。
- 二三、海—海邊、海岸
- 二四、參—「慘」に同じ、まぜる。
- 二五、把辨大羊山—John Crawford の “A descriptive Dictionary of the Indian Islands & adjacent Countries” 一八五六年版は Papandayang 山に就いて次のやうに述べてゐる、「Cheribon 州西部 Sukapura 地方にある、海拔八千フィート、ジャワに於ける最大の火山の一であつたが、一七七二年の大爆發で、その大部は地中に陥没した、八月十一日の深夜に爆發し九月廿四日に至る一ヶ月半の間絶間なく鳴動を繰返し、附近一帯に噴出物が三フィートの高さに積つた、四十ヶ村が半ば地下に呑込まれ、半ば熔岩に蔽はれた、二千九百五十七人の住民が、この爲に殺傷した。」これは Batavian Society of Arts and Sciences vol 9. の Dr. Thomas Horsfield の記事を引用したものである。
- 二六、看官請爾想一想—皆様、まあ想像してもごらん下さい。
- 二七、擔摩羅山—Tomboro 山、海拔九二五〇フィート、咬嚙吧總論の筆者はその爆發を嘉慶二十二年即ち一八一七年となしてゐるが Crawford の辭典では一八一五年に史上未曾有の大噴火があり、直接間接に一萬二千の住民を死なせたと記してゐる。
- 二八、前八年、即嘉慶二十二年—この咬嚙吧總論が書かれたのは嘉慶二十二年から八年後、即ち道光五年（一八二五年）と云ふことになる。

咬啣吧總論第二回

土性 夫地土爲人所依賴以得食、其地瘠則其人貧且勞、其地肥則其人富且逸焉。且咬啣吧之地土甚爲肥厚、勝於馬六甲 (Malacca) 及巨港 (Palembang) 等處之地土、因有多火山之材料與其土泥交參、又因天上降雨時山邊之零土同流下平地去、致其土面成厚、所以爲肥也。其土之形色亦烏亦赤、少石多泥、似菜園內之土、而若有時雨常灌、可以每年兩次收斂矣。且在西邊雖有幾處其土紅輕、然大概言之、咬啣吧之土爲甚肥也。

天氣 且咬啣吧爲近地^二中帶、離太陽不遠、所以其天氣太熱、如中國夏天一般、在日午時^三做工行路不便、而略有家資之人常帶雨傘以遮日頭、或坐馬車以避暑熱。彼地人皆穿夏布輕衣而不須着^四小呢皮裘等物、又不消^五近烘爐以煖其身。且在吧城其暑熱爲甚於山頂處、故此住彼之人常時^六着病夭死而罕有過三代之家業也。又每年過來之新客、因即時行粗^七、逐日在外擔物掘地、日曝雨濯、所以十有死五而病者無數矣。惟多人新來的自招其禍、蓋有的無緣無故日午時遊行在外、有的流汗滿身隨即沐浴、而有的亂食毒物無慎、所以成病、若然人不可說水土不好、時運不平、乃該反責自己也。又在吧城井水不可食、只有港水好用、惟在此港、人民慣熟丟下各樣穢污毒害之物、沐浴廁池、馬糞牛屎都歸此小港內、以致其水爲甚^八阿膾、然而專用此水以煮飯煎茶、或冷食^九之、何能有利於人之腹肚呢。但只是吧城如此利害、蓋其地低、而

周圍有水澤、從下面濕氣常起、從上面天熱時降、而人在水火之中、焉得快活哉、而安能免寒熱小痢之病乎。因此荷蘭人多出城外五六里住居、蓋彼不能當其濕氣也。除吧城及另一兩個埠頭外、咬嚼吧地都算得爲好水土之處而人可往之無防焉。

四季 夫春夏秋冬爲年內之四季、惟在吧地只有春夏而已。蓋在其地全年爲便以收成五穀菓實等、所以秋天不分甚明、又全年爲暑熱無寒冷之時、無落葉之際、草木常青、天氣常煖、所以總不得有冬天也。且自年終十一月至明年三月大雨常落、致江河漲溢、而田地水滿、此時謂之春天、又從三月至十月、天氣太旱、甘雨罕落、致地面成硬、而天氣甚熱、此時謂之夏天也。又有人分其兩時爲濕時乾時、此說亦可也。

五穀 夫稻黍梁麥粟爲天下之五穀、而養生之要物也。且大概言之、吧地雖有五穀、但麥粟兩樣最爲豐盛、蓋吧地有高山並有水田、高山可種麥、而水田多種粟焉。且亦有番麥、番黍、綠豆、土荳等爲吧地所出之土產也。

菓子 且吧地有幾樣菓子、與中國所出之物多有不同者、今且略指而言之、如李、梨、棗、枇杷、荔枝、龍眼、楊梅等菓中國獨有、而吧地總無也。且如杏子、花桃、橄欖、無花菓、栗子、松子等菓中國有、而吧地罕見者也。惟甜柑、酸柑、佛手柑、橘子、柚子、葡萄、木瓜、西瓜、金瓜、石榴、甘蔗、玉梨、黃蕉、波羅蜜、檨子、椰子、檳榔、荔枝、番荔枝等菓中國及吧地皆有者也。且亦有幾樣菓子中國總未見者而此處常出。一、夢吃菓、或照正音名曰蔓革士天菓 (Mangostin)、其樹似橄欖、高大數丈、形團圓如帷

蓋、枝葉茂盛、美好可愛、其葉長四寸而闊二寸、春天開花、六月結實、其實圓似桃、外皮厚半寸、甚紅且苦、內有六七仁極白且甜如蜜、仁中亦有核、其核苦、而不可食者、此夢吃最美之菓、雖多食之亦不傷人焉。二、紅毛丹菓、或名曰亞齊菓^{二三}、樹形似橘、實以荔支、且皮外生紅毛、皮內有仁略似荔支仁、惟其色嫩白、而味甜、仁內之核不可食、亦爲春天開花、六月結實者也。三、流連菓^{一四}(Dhian)、樹高數丈、端直寡葉、夏末結實、其實大似柚、皮粗而有刺、實可分五六房、每房有五六核、核上有肉、聞味甚臭、但其肉極甜、新客少能敢食者、但既慣熟多喜食之、此菓甚良無毒、健脾補胃、食之有益焉。四、亞杉菓^{一七}(Assam)樹高大茂盛、葉微而叢、蔭影甚密、在路傍花園多栽之、其菓在殼內似豆、每殼有六七核、核上有肉紅且酸、人用之爲配飯料物^{一八}。

蔬菜 蓋嘗曠觀吧地而知菜之爲類甚多也。其所生者有如葱頭、蒜頭、莞荖、薑母、白菜、芥葉、韭菜、莧菜、蕪菜、芹菜、生菜、苦菜、葵菜、蓮花菜、高麗菜、芥蘭菜、亦有大芋、大薯、番薯、荷蘭薯、番葛、更有菜瓜、西瓜、冬瓜、刺瓜、金瓜、角瓜、併有瓠子、茄子、香蕪、菜頭^{一九}、菜荳、綠荳、肉荳、荷蘭荳、厚末、阿等、且還有許多樣菜不能歷紀其數、所以大略言之也。

樹木 且在山林處殊樣樹木生植、其用不一、但吧地多出一樣最好的木名曰惹底木^{二〇}、其樹高十餘丈、周圍丈餘、生在高山、百年成木、其幹端直、葉粗大、文細密、最堅硬、造屋及船多用之、千秋不壞、凡木莫良于此。且吧地有松栢榕桑棉花等樹、爲與中國相同者也。

禽獸 夫在走獸之中、獅、象、駱駝、驢、騾等皆無在吧地。惟虎、豹、犀、熊、猴、鹿麋、山牛、山狗、山猪、灰鼠、山兔等獸皆有在山林中。且人民家中亦有小馬、黃牛、水牛、山羊、綿羊、猪、狗等畜生也。在飛鳥之中、吧地出鸚鵡、小鷹、鴉、白鶴、鷓鴣、鶻、塘鵝、鷓鴣、烏鴉、孔雀、雀仔、燕等、又人養之禽有鵝、鴨、鷄、鴿等吧地皆有也。又在爪哇南邊及在中山有多深洞出燕窩、中國人所喜食者、但未知此燕窩爲用何物做、或者其燕子常往海邊、收集各樣膠黏等物、而把之爲巢、或者是燕子自內吐出以爲巢所以成燕窩、未知孰是、且論及其燕窩之用處及價數、下文將再言之。

第二回註

一、鳥—黑

二、地中帶—赤道

三、做工—一般的な意味では「仕事をする」、狭い意味では做生理に對して「筋肉労働をする」又は工藝品の製作等に從事するを云ふ。

四、小呢—カシミア製ズボン

五、不消近—必要としない、烘爐はいろいろのこと。

六、看病—病に罹る。

七、行粗—無理をする。

八、阿臍—汚濁

九、食—南支那語では「飲む」の意にも「食」を用ひる。

- 一〇、算……となす、……と見做す。
- 一一、菓子——般に「果物」の意に用ひられる。
- 一二、蔓草士天菓——マライ語で Manggis 又は Manggista 又は Manggustan である。Mangga とは細長い果實の意である。
- 一三、亞齊菓——これに相當する適宜なマライ語が見付からない。asin || asinasin || chékók と云ふ樹名があるが、これは南洋特産「たかとうだい科」の灌木であつて、マライ人が好んでその葉を噛むだけである。
- 一四、流連菓——海録では流連子と作り、新埠(ヘナン島)の産物として擧げ、瀛涯勝覽蘇門答刺(スマトラ)條にも賭爾と作つてゐる、この流連、賭爾共にマライ語の durian に由來するものである。
- 一五、聞味甚臭——匂をかいでみると甚しく臭い。
- 一六、新客——新に渡來せる支那人を指す。
- 一七、亞杉菓——マライ語で asam (|| masam) と云へば一般に酸味ある果實を總稱するのであるが、これはタマリンド即ち asam java の實を指すのであらう。
- 一八、配飯——副食物、おかずとする。
料物——添味料とする。
- 一九、菜頭——大根
- 二〇、惹底木——チーク材 (Teak wood) のことを指す、惹底とはジャワ語の jaté に由來する、この語の原義は「眞實」である。

咬嚼吧總論第三回

人物 蓋廣視中國南邊各海嶼之住民、都分爲三、即嘮味咄 (Malayoe)、嘮吃 (Bugis)、及爪哇人 (Java)

但本來俱共一祖而從一源流傳也。上古時無人住此海嶼、而該爲別國人出外流傳到此、但由何方先來者不能知其詳也。或者漢朝時有人在安南、暹羅等處、坐船南行到此各海嶼而不知回頭、所以住在其地、生產子孫、布散四方、致各州府有人住焉。且在歷代之久、嘑唻咄及嘑吃人不定住一方、乃專務行船爲業、惟爪哇人罕時出門、寧喜耕田爲生、故此爪哇人民尤成富厚也。又在漢朝光武帝時(A. D. 二五—五七)有人從五印度國過海到吧地而教人以識字作文之藝建屋修城之工致儒雅更進矣。且論及爪哇人之相貌、其身非高、乃中央大、又非異醜、四肢如常、其手腕^四脚目甚小、頭額高滿、而目眉清秀、眼睛大且烏、鼻小而平、口大唇厚、惟其齒故意染烏、嘴鬚却少、首髮^五烏長、面貌溫潤、及其動行從容而已。其面色非烏非紅、乃略似嫩黃、又其慣熟抹黃粉在面上、致其色成如黃金焉。且山居之民多有癭腫疾、即其頸上生零肉^六大如柚子、惟無疼痛、只爲異常而已。在幾處全鄉全里之人遇此病、亦在幾家歷世之子孫都有之焉。此或因其飲之水太冷、或因其住之地甚寒、但未可知也。

民數 夫在吧地各州府之居民不定一數、蓋每有富厚之處人民多居、而凡瘠薄之地人少居焉。像在萬丹(Batavia)及西邊各州府居民更疏、惟在東邊地平且肥、故居民尤密也。且若論其民數、大略分爲四分、一、荷蘭人、約有一萬。二、^七唐人、約有十萬。三、嘑唻咄人、約有三萬。四、奴婢等、約有三萬。五、爪哇人、約有三百八十三萬。而共算起來、約有四百萬人民在吧地也。昔者吧地民數未到如此盛、惟近來人民日生尤多、其故有五、一、因五十餘年久通吧地全無戰爭、乃百姓獲太平也。二、因近來無大旱饑荒、

乃每年收成豐盛、所以民有餘粟、而總無失其養也。三、因叭啞水土甚良、其人可享長壽、蓋有人生到百餘歲、有多人七八十歲、而其大半過四五十歲矣。四、因叭啞人少年時娶親成家、男子十六歲娶妻、而女子十三歲嫁出、罕有男女到老而未成親者也。故此其早生產子孫而人民快生益多焉。五、因在吧地謀生爲易、天氣常煖而人不須着多衣、或建大屋、椅棹、眠床、一切貴物皆不須用、乃凡要用之器皿買之甚便宜、或自己可以做之焉、故家內所費爲少、而子女雖生多亦不難養之也。因此五故吧地居民日生更多也。

旅客 且在吧地除居民外還有最多旅客自別國來到咬啣吧歇住謀生。昔者宋朝時、唐人先來到吧地、而從彼時以來常有人到此、以做一時之貿易生理、或住下幾年以賺幾文錢纔轉回唐山去、惟大半悅住此地娶親生子而終身不回。且因中國婦人不得出外、所以其新客多娶叭啞婦人、或娶唐人所生之女子、而凡如此生者、唐人謂之答答。現在有五萬唐人在吧城、亦有一萬餘人在二吧壠(Semarang)及四里狸亞(Sitabaya)二諒有四萬唐人布散在咬啣吧各州府中、共算約有十萬唐人在吧地也。且唐人住吧地常照中國之風俗而行、其所穿之衣、所居之屋、所行之禮及所奉之教皆如中國一般。但因中國有多人舛錯、而專一服事假神、所以凡出外遊而聽知有更深妙通達之道、該學而從之。且凡從耶蘇之教、不須換衣服、改禮貌、只要棄惡歸善、木像不拜、銀紙不燒、常守禮拜日、敬畏神天而已。中國廣東省人出外到吧地大概爲做木匠、鐵匠、裁縫、緝鞋等工、亦有幾個做生理。惟福建省人常以貿易爲業、在吧城有的開行做大生理、或換公班衙碼仔、總是人人都該以老實爲本、一則以得衆人憑信、一則以獲神天之保祐、生理纔可興旺矣。除中國之旅

人外、亦有嚙味咄 (Malayae) 及嘜吃 (Brgis) 人寓歇在吧地、惟其多住在吧城及每出船之埠頭、方便以做生意、而叭啞地罕有之也。併有多少亞拉比 (Arab) 人住在革利色 (Grise)、其亦以貿易爲生、惟其大半爲教士、示番人以回回教也。

奴婢 蓋上文曾言、吧地有三萬奴婢、在此處合該詳言及之。夫叭啞人總未嘗做^{二〇}奴才、而或有叭啞人被拿見賣者、若能現明其爲叭啞百姓、其即時得釋放也。故凡要買僕婢者必往到^{一五}貓哩 (Bali)、或^{一六}啞味 (Timor) 吧吧哇 (Sumbawa)、嘜吃 (Brgis) 等處纔可得之。在彼地每犯罪者被賣爲奴才、亦有富貴人搶奪貧窮孤寡之輩、而賣之以得小微利。此大逆天理、滅絕人倫、致父子兄弟離散、不得盡其孝弟之理、乃勉強爲奴於別人家、於呼世人沒仁、喪義、無恕、無憐、不能以人之心爲己之心、而反以己之所不欲施與人焉。且商船往彼處、或買或奪番人、載到吧地賣之與荷蘭人及唐人爲僕婢者。且在吧地凡爲奴才者不得自己主意、乃行作必如主人所使、其亦不能自己^{一七}有家伙及藏貨物爲自己用、連其衣服食物亦算爲主人的、而主人可隨意拿之去、只不至餓死而已。且奴才不得隨時出家換主、而其子孫至千萬代亦爲奴才然、惟此節最可恨可惡。蓋憑他本身有罪、而因其惡見賣、其末生之子女、何罪呢、而就是其親生之兒女陷於父母之難、其後代子孫至千萬世、何能連累得乎。但除此外、吧地凡奴才之情形^{一八}略爲可耐得、蓋其未被使爲^{一九}太重之工、乃只做家內之事、又其主不能無緣亂打而責之過分、乃凡有大事、該解之到列官、被審、如別人一樣、又不論其罪何樣大、其主不得私殺、而若殺他如殺平人之罪。又也近來商人不得載奴才入港口、若然、其刑

如載禁貨之罪、連船被拿、連人被罰、所以奴才不得增多、而過幾年、或者其可暫暫無也。

第三回註

- 一、噶唎咄—南海寄傳の末羅遊、海録の無來由である、即ち廣義のマライ人を指す、この名稱は今のJambiを中心とした Malayu 國 (A. D. 672 年) に由來するであらう。
- 二、噶吃—海國聞見録の茫佳虱、海録の茫伽薩、又は Moh Herman の地圖に記された Macaffe 即ち今日の Macassar を指すものと思はれる。が「噶吃人」となると、Macassar 一帯に住む Bisis 人を意味したのであらう。
- 三、五印度國—五天竺、五天と同じく印度を總稱する古代印度は東天、西天、南天、北天、中天の五區劃を有すると考へてゐたのに由る。
- 四、脚目—足のくるぶし
- 五、首髮—頭髮
- 六、生零肉云云—甲状腺肥大のことであらう、柚子はざぼんのこと。
- 七、唐人—唐山人とも云ふ場合がある。
- 八、謀生—生計を立てる。
- 九、眠床—支那式の寢臺、椅棹はテーブルや腰掛
- 一〇、便宜—値段がやすい、convenient の意味の時は「便利」を用ふる。
- 一一、諒—另と普通、別々の意
- 一二、服事—祭る、崇拜する。
- 一三、換公班衙碼仔—總督府(役所)の御用商人となる。

一四、老實—誠實、商賣熱心

一五、囉哩—麻黎又は婆利、諸蕃志蘇吉丹條では麻籬又は琶離、即ち現今の Bali 島である。

一六、咄味—海録の地問、諸蕃志の底勿又は底門、島夷志略の吉里地問、東西洋考の遲悶、海國聞見録の地問即ち今の Timor 島である。

一七、家伙—家財道具

一八、略爲可耐得—幾らかよいやうである。

一九、工—労働、仕事

二〇、奴才—下僕、召使、奴隸

咬啣吧總論第四回

房屋 且在吧地黎民之房屋、只爲竹^一箆所做而茅草所蓋。其故有三、一、吧地之人貧、不能多費錢財以建瓦屋。二、衆人只顧眼前之事愛省勞免工、不想及後來子孫享福安否、故用茅屋許多。三、在吧地少有^二司傳、建置大屋、乃百姓各人自築己房、所以只搭竹茅之屋而已。其屋小間^三、建在土上、只一層無樓、而非如暹羅人先栽柱而起屋在柱上以免水濕、惟呱啞非然、乃以土爲底、而只搭眠床坐床高一兩尺致睡坐安焉。先後有門、門外簷子伸長以遮日避雨、門裡左邊有一小臥房而右邊有竹床以便食飯閑坐、蓋其人無用椅棹、乃常跣脚坐在床上也。周圍無窓、只門口有透^四亮之所、然此亦無防於事、蓋吧地爲溫煖之處、男人

之工多在外面造作、女人亦坐門外簷前之下以成其工矣。牆壁剖竹所爲、竹先創平、然後打辦成篔、楹桶皆用竹做。惟在西邊民少木盛、人多用木杉爲楹桶、屋頂常茅草所蓋、亦有一樣樹葉名啞塔葉二三以蓋屋、而或用剖竹互合像扁瓦子一般。總是徧視爪啞黎民之房屋、比別州府更爲受用六、無甚費財、只值一兩銀子而已。且富貴人的房屋亦照此樣、不過建爲更大、而有八連屋頂、四連高、四連底、而值銀錢約有五兩銀子也。且唐人及嘮唻咄住在彼地者、若則恒足則建瓦磚之屋以爲長久之計。又古時庵廟亦石磚所建、惟現在此廟皆倒壞也。

鄉村 上所言之房屋罕有單間、乃百姓多喜聚集在一村裡住焉。其村或大或小、照其近之田地廣狹、又照其水利以灌田。在東邊每村約有二百餘人住、惟西邊只有五十餘人居一村也。且在鄉里中、每屋周圍有園、栽以樹木、甚密且盛、一則以摘其菓、一則以享其蔭、故遠望之凡房屋不得而見、只看青葉之茂盛如樹林焉。又春天水滿時、鄉村見如海嶼、而四方之田水漲亦如海面焉。且凡鄉裡之屋園算爲農人自己家業總無納稅、惟村林之田常納稅與地主。倘苦一鄉之百姓生多而園地不足、則余民必徙別處、就空地而居另成一村。初建之先、新村屬舊村所管、惟久後新村再建首人、而獨自管理也。且每村內有數長者及一公衙、以集會商量審定各件小事、並有一禮拜寺及一教師、料理凡拜神之屬也。

府城 且在爪啞地有兩個京都、卽噶囉 (Soerakarta) 及叭叭 (Jogjakarta)、又有各州之府城、俱係端方、街巷畫直、而周圍有籬笆以護衛在內者、城中有一大院、左邊有禮拜寺、而右邊有首人之家也。

宮殿 夫呱啞之宮殿爲四方端正、大十餘里容得萬餘人、周圍有牆及溝池、牆上有鏡如城上鏡焉。前面大門外有空院、四方圍以籬笆、在此空院中、百姓聚集以朝見王家。又外院中有兩叢榕樹、古時所栽至今還存、爲御所之記號。過此外院、則見前門高大、有階可登、上面一座位、新君嗣位時則升之臨朝。若下階進到內門、透過內院、則到欽道、引至朝廷在此廷內、王家每日設朝、其廷建置甚雅花彩、兩旁有小廷、羣臣侍立以待朝、又廷後有王府、皇家所居之宮也。且各州內首人之府亦照此樣、惟小而稱別名也。

家伙 夫呱啞人在家內無用甚多器具、只眠床竹做、鋪以軟席、加兩枕頭、用己衣被蓋、如此大衆睡安、而弗慮無蚊帳被單等物也。其煮飯用土^九 名曰咪啣^{三四}、煮熟放之于木盤或銅盤、而無用碗碟箸子、乃把飯在乎、挾之生丸、則拈其丸兩指之間、去之下咽喉去、若食菜魚牛肉等物、亦把之在手食、無用刀切之焉。只飲湯時、有用湯匙而已、且此言及下民之事、惟富貴之家未必然也。蓋有錢者喜買床蓋、地氈、椅棹、面鏡及各樣華麗之物也。

衣服 且在吧地人多尙衣服齊整、而襪襪之衣裳人視爲可羞、窮人穿烏粗之布、惟富厚者喜着紬緞、小呢等衣也。照吧地之風俗、人家之婦女織紡線^三、織布、爲男人用、自王家達於庶人皆然、每屋內有紡車機杼、而貧富大小、願着婦女所成之衣也。且其常用一樣襪衣、番人叫嗽噠者^{二三}、卽是一條華布、長約八尺、闊約四尺、兩頭縫合如囊無底焉。番人用此襪衣、或佩在肩上、或圍在腰、而垂下過膝似裙。作工行路時、卽把襪衣束緊、惟有閒及見長者時則放之垂下也。襪衣內男人亦穿短褲、而身着小衫、袖短無鈕^四、頭^五

上裏巾、而在外時、另有竹笠以蔽風雨。腰中束帶、帶裡常插手巾及檳榔匣、又每人各帶一枝小刀、插在身邊以自保護。脚上無鞋無襪、乃貧人赤足而行也。且女人亦用襪衣圍身、但無束之緊、乃常放之垂下。腰上束帶、^{一八}胛空下至腰圍一條布以縛胸膈、而上有一領烏衫、長至過膝、兩袖尾有鈕扣、頭上沒有裏巾、惟常梳頭縛髮而飾之以串珠、或以插花耳。男女大小都用^{一九}手指、而其衣服大概不過值一兩銀子也。小兒並無穿衣、乃至七歲裸身而已。至於富貴人衫內另穿一領佩身^{二〇}裪仔、白布所做、而有一行鈕子在胸前、扣緊至頸項矣。若行走在外、則載大帽、^{二一}紬緞所爲、帽邊廣闊以蔽面貌、不被日曬也。且呱啞男女總不剃頭髮、乃留之生長、男人閒時縛毛在頭上、並插木梳使之緊定、惟見憲長者時即放鬆頭毛、垂下在頸上也。衆人抹油在首髮、惟富貴者常把香油傳之、其亦喜飾首以金玉而各樣貴物也。

戰衣 且呱啞人出戰時另着戰衣、即與常衣略異也。其先穿一條^{二二}花文布褲、長至脚目、旁邊從股至脚、扣鈕緊定、褲上亦穿短褲、係絲絹細綿所織、精美細潤。此着畢、則把一條^{二三}紬緞或幼布纏繞在身上、六七圍、以使自己體壯健也。此上亦穿裪仔、而在外又着一領花文布衫、腰束錦綉帶掛劍插刀、小刀用三枝、一爲自己買者、一爲父親遺者、一爲岳父送者、此尾一枝恒放左邊便用。出戰時常穿極美之衣而掛凡所有之金玉珍珠等物也。

朝衣 夫呱啞人臣朝見王時、從腰以上總無穿衣、只着緞褲、而褲上圍一條長布而已。帶爲錦綉極美、右插一枝小刀、左掛一枝斧鉞以便砍木刈草、出自王家之命令也。頭上載一樣帽、高直堅硬、或白布或青

布所爲、而頂上有一粒寶玉如中國官府之頂戴焉。身上無穿衫、但抹黃粉以爲好看也。

食物 夫呱啞人專奉回回教、或曰吠喃、故不敢食猪肉、又因其祖宗受五印度國教或信佛祖、所以有人不敢食牛肉、惟除此兩件外、俱隨便食無防也。吧地米粟豐盛、每人月食三斗、所配魚蝦鷄鴨等物、海邊鮮魚甚多足用有餘、而凡食不能盡者、則曝乾而賣入內山去。^三羊肉、水牛、鹿麋、皆爲呱啞人所食也。鹽本地有出、略爲便宜、又呱啞人煮糖非用甘糖、乃把一樣松樹所出之汁、煮之爲烏糖矣。其配飯亦用各樣材料、一爲小蝦所做、初拿時曬之半乾半臭、則搗之至爛、小跂鹽後、則收在桶內、此謂之塗蝦糞、而番人叫做嚼臘噉、其味臭辣、惟衆人喜食之也。在吧地若遇年荒、米價高、人則食番麥、雖山深僻壤之處亦有芋根等物可以救餓也。

第四回註

- 一、竹簞——竹簞のこと、即ち竹で編んだ蓆。
- 二、司傳——主として土木建築、又は工藝製作に従事する職人親方、師匠を意味する、司阜も之と同じである。
- 三、小間——間は軒に同じ、即ち建物が小さいこと。
- 四、透亮——空氣が流通する。
- 五、削平——平にけづる。
- 六、受用——役に立つ。
- 七、料理——掌る、處理する。

八、籬笆—垣根、圍ひ。

九、被單—掛けぶとん。

一〇、土 — 土製のなべ、土なべ。

一一、小呢—カシミヤの類。

一二、紡線—木綿絲、「線」は絲の意味で使はれる。

一三、嗷嗷—サロン、マライ語の sarong である。

一四、鈕—ボタン

一五、頭上裏巾—頭上に頭布をつける。

一六、束帶—帯を締める。

一七、鞆—靴下

一八、胛空下—腋の下

一九、手指—指環

二〇、裨仔—チョツキの類、袖なし。

二一、花文布—華文布、綾のこと。

二二、内山—内地、奥地、又は内地の山地。

二三、啞啞—マライ語にて總べて屋根をふくものを atap (≡ hatap) と云ふ、潮流のさす河岸に繁茂する nipah と云ふ棕櫚科植物

の葉 nipahs を骨材に、ロタンを編絲にして縫つて作つた屋根葺材料である。

二四、啣—バスケット、籠を指すマレー語の bakul と關係があるやうである。

(未完)